

小学生 中・高学年向き

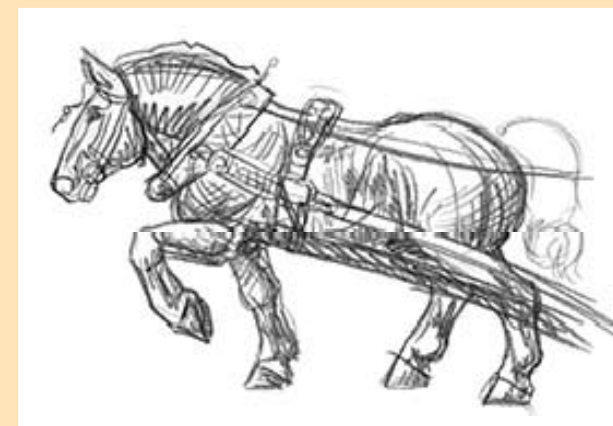
赤べえ

赤
べ
え

原案・米永 道裕
作・旋丸 巴
絵・谷 歩



原案／米永 道裕 作／旋丸 巴 絵／谷 歩



はじめに　　～先生方・ご家族の皆様へ～

この物語は、昭和三十～四十年代、日本全国の農村地帯で起こった話です。

馬は、競走や乗用だけの生き物ではありません。かつては、人を乗せ、物を運び、未開の大地や広大な畑を耕す貴重な原動力でありました。戦時中には戦争の武器として、戦後には食糧難の折、貴重な動物性蛋白源として、我々人間に尽くしてきました。

これらに代表される馬が、この物語に出て来る『農耕馬　赤べえ』です。

そんな、人のために働き続けた農耕馬は、かつては百万頭を超える頭数を誇ったものの、物理的な存在意義や使用価値だけが問われ、今や年間生産頭数は二千頭を割らんとしております。極寒の地を切り開き、人に潤いを与える存在であった農耕馬。私たちが今のような文化的な生活を満喫できる基盤を作ってくれたのは、この馬たちに他なりません。

現在は、年間二百頭しか走れない『ばんえい競馬』を目標に、北海道東部を中心に生産が続いていますが、実際のところ、北海道の人々でさえ、その存在すら忘れられようとしています。存在は知っていても、『なぜ、こんな馬がいるのか？　何をしてたのか？』が、農村地帯でさえ語り継がれなくなっています。

人として、決して忘れてはいけない感謝の念をはじめ、多くのことを気づかせてくれたのは、帯広小学校六年生が披露してくれた、この物語の学習発表会でした。

どうぞ、大人の皆様もお読みいただき、お子様といっしょに馬を見て、友としてふれ合い、応援してあげてください。きっと、心温かい『赤べえ』に魅せられることでしょう。

平成十六年三月

十勝馬事振興会　佐々木　啓　文

一

この話は、僕が小学校五年生、昭和四十一年から始まる。

大雪山系たいせつさんけいと日高山系ひだかさんけいが遠く、かすみに揺れる春ゆ。学校からの帰り道、うちが近づくと、じいちゃんじいちゃんと赤べえが畑を耕している姿が見えた。

「じいちゃん！」

手をふると、じいちゃんが顔をあげる前に、赤べえが鋭すんげじくないなait。

赤べえは、うちの農耕馬のうこうば。畑を耕したり、種をまいたり、そんな畑の仕事を全部引き受けてくれる大きな馬だ。背中までの高さは、じいちゃんの背よりずっと高い。首なんか僕の胴体より太くて、蹄ひづめだって井ふしばちをひっくり返したみたいだ。だから、力も物すごく強い。強いけど、とても優しく、じいちゃんといっしょに、朝から晩まで、文句もんくも言わず、ずっと畑で仕事をする。

今日もプラウをひいて畑を起こしている。

僕が畑に入って行くと、赤べえは僕の胸に顔を押しつけて甘あまえた。

「勇作は、赤べえが好きだな」と、じいちゃんは笑う。

でも、僕は気づいていた。馬を飼^かう家がめつきり減^へつて来たことに。同じクラスのアキラの家も、サチコの家も、そして、となりの小山さんちも、みんな、馬を売った。馬を売って、その代わりにトラクターを入れた。

「じいちゃん、うちは赤べえ売らないよね。ずっと、赤べえで畑、耕すよね」

「おお、当たり前だ。馬あつてこそ、うちの畑も、ここまで大きくできたんだ。農業は人馬^{じんば}一体^{いつたい}。赤べえを売るもんか」



「わー、今夜は、ごちそうだな!」

ちやぶ台の上のコロッケに手をのばしたら、ねえちゃんに手をピシッとたたかれた。

「勇作、ぎょうぎ悪いよ! とつさんと、じいちゃん、まだ帰って来てないんだからね」

うちで一番偉^{えい}いとうさんとじいちゃんが、いなかったら、ごはんは食べられない。

「とうさんたち、どこに行つてんの?」

「新しいプラウを買いに。今のプラウは古くてダメなんだって」

そんなことを言つてると、とうさんとじいちゃんが帰つて来た。



それで、やっと家族全員で

「いただきまーす」

「で、いいプラウは見つかった？」

かあさんが、とうさんに聞く。

「ああ、佐吉^{さきち}んとこで使つてたプラウをかうことにした。あそこんちは機械を入れたから、馬でひくプラウはいらなくなったんだ」

「じゃあ、馬も売っちゃったの？」と僕。

「そうだ。馬売ったもんだから、まだ新しいプラウ、いらなくなったんだとき。もったいないなあ」とうさんの代わりに、じいちゃんが答えてくれた。

「佐吉のじっちゃんも、馬使つて、ギックリ腰^{こし}になっちまったんだと。で、機械を入れたんだと。ト……、トラ……なんとかって言う機械を」

「トラクターでしょ。馬の代わりにプラウを引っぱる機械」

「梅子、なんで、中学生のあんたが知つてんの？」と、かあちゃんが驚^{おどろ}くと、

「社会の時間に習ったもん」と、ねえちゃんはニタツと笑つた。そして、「やっぱり、これからは機械だよー」と、うつとりしたように言つた。

三

「へつ、みんな、くつだらねえ機械なんか買いやがつて」

最近、じいちゃんは、きげんが悪い。僕が学校から帰つて、赤べえと、じいちゃんが働いているところに行くと、いつも、じいちゃんは、僕と赤べえの顔を見ながら、こう言うのだ。

「でも、機械の方が馬よりずっと仕事が早いって……」

「勇作まで、そんなこと言つて。ちよつとばかり仕事が早くてダメだ。馬は畑を起こす時だけに使つてゐるんじゃない。馬車をひかせたり、馬^{たいひ}フンから堆肥^{たいひ}作つたりしてんだ。その機械、フンするか？ フンしない機械なんか使いものにならない。なあ、赤べえ」

赤べえは、「そうだ、そうだ」と言うように、フンと鼻を鳴らして、じいちゃんに顔を押しつけ、じいちゃんは得意^{とくい}な顔になつて、また仕事を始めた。

畑を耕して、馬車をひいて、その上、馬フンまで利用できる馬。それが、どうして、いなくなつて行くんだろう。





四

「次の春がやって来て、昭和四十二年春。とうさんと、かあさん、そして、じいちゃんは、今年も、いや、今年こそ収穫を増やそうと、はりきっている。赤べえも、がんばっていた。じいちゃんが手綱を取ると、毎朝、元気良く畑に出かけて行く。そんな赤べえのたのしいお尻を見送ると、僕は、何だか、とても安心できた。

「フンもしない機械に負けるな、赤べえ。今年は一本松のどこまで畑を広げて、馬を売ったやつらを驚かせような。馬売って失敗した、と思わせてやろうな」

じいちゃんは、いつになくはりきっていた。ところが……。

ある日、赤べえが倒れた。じいちゃんの気持ちにこたえようと一生懸命働いて、働き過ぎて、とうとう足を悪くしてしまったのだ。

「やつぱり馬なんかじゃダメなのよ」と、ねえちゃんは言う。「これからは機械化の時代。アメリカみたいに大規模な機械化農業で、作業効率を高め、生産性をあげないと。勇作、あんただって、その方がいいでしょ?」

「サギョーコーリツ？ セーサン
セー？」

「もー、あんたも六年生なんですよ。しつ
かりしなさいよ」

「けど、じいちゃん言ってたぞ、馬は馬
車もひくし、馬フンは堆肥たいひになるって」

「バカねえ、あんた。馬車よりトラック
の方が、ずっと、たくさんの荷物が運べ
るしよ。馬フン？ これからは化学肥料ひりょう
の時代よ。くさくて重い堆肥たいひなんかより、
ずっと扱いあつかやすいし。もう、馬の時代じゃ
ないのよ。となりも、向かいも、みんな
みんな機械入ってるじゃない。馬でやつ
てるとこは、うちだけよ」



五

機械の味方は、ねえちゃんだけじゃなかった。晩ごはんを食べていると、とうさんがポツリと言った。

「うちも、そろそろトラクター、入れるか」

「買おうよ！」

ねえちゃんが、パツと顔をかがやかせた。

「そうだねえ。赤べえも足を痛がつてるし」と、かあさんも、うなづいた。

「そうそう」

ねえちゃんは、ますます声をはり上げる。

「買うか」と、とうさん。

「買いましょうか」と、かあさん。

「やったー、買おう、トラクター！」と、ねえちゃん。

と、次の瞬間……！

「いらねえ！」大きな声が茶の間ちやまにひびいた。「機械なんか、いらんぞ！ 機械、機械つて、
畠山はたけやまのとこ見てみる、去年きょねん買った機械の借金返すのに、えらい苦労してるでねえか。小川こがわの家の



んか借金返すのに、馬、売ったつていうでないか」

「だって、もう馬なんかいららないんだから、売って当然^{とうぜん}じゃない」

ねえちゃんがムキになって言い返す。

「梅子、おまえ知ってるか？ そうやって売られた馬はな、買い手がないから馬肉にされるってこと。家族のために一生懸命働いて、そのあげくが馬肉じゃ。わしは、赤べえを馬肉なんかにせんぞ！」

じいちゃんは、今まで見たこともないくらい怒っていた。でも、じいちゃんの目は、何だか、とっても、さびしそうだった。

六

結局^{けつぐ}、その年、うちではトラクターを買わなかった。赤べえは……。

「おまえの足も良うならんなあ」

じいちゃんは、毎朝、そう言いながら、足を引きずる赤べえと畑に出た。

「赤べえ、見ろや、あの十勝川^{としかがわ}の堤防^{ていぼう}から、ここまで、おまえといっしょに何年も何年も耕して来たんだ。土地も少しずつ広げて……。佐吉のやつは、おまえのこと、もう年だなんてぬかしやがるけど、おまえだって、わしだって、まだまだ機械^{しやうき}なんかには負けないこと証明^{めい}してやろうな」





そうは言っても、足の悪い赤べえでは仕事ははかどらなかつた。
 「なあに、赤べえの足さえ治れば、すぐにおくれを取りもどせるべ」と、じいちゃんは言つたけれど、ほかの家はイモをまき終わっているのに、うちはまだ半分。これではいけない、と、家族みんなでがんばつた。そのおかげで、何とか春の作業は終わった。
 けれど……。

七

秋、収穫が終わつた時、今年の収穫は、いつもの年の半分だつた。赤べえの足のケガで、春の種イモまきがおくれたせいだ。

とうさんは冬の出稼ぎに出ることになった。今まで絶対に出稼ぎに行かなかつたとうさんが……。とうさんが出稼ぎに行く日は家じゅうが落ち着かなかつた。

「忘れものはないかい？」と、かあさんは朝から何度も同じことを言っている。

「とうさん、無理しないでね」と、ねえちゃんも、今日は、しおらしい。

僕は……。僕は、何だか朝から、おなかが痛い。内地に行く、とうさんに心配をかけちゃいけないと思つて、がまんしていたけど、横腹が痛くて、つらい。

「勇作、どうした？ 腹痛いんかい？ じゃあ、台所の正露丸、飲んで来な」

かあさんに言われた通り台所に行つて、茶だんすに手をかけようとしたけれど、痛い！ 本当に痛い！

「勇作、とうさん、もう出かけるよ！ どうしたあ？」

呼びに来たねえちゃんが、悲鳴をあげた。



「勇作、どうしたの！ 大変、病院よ！ かあさん、私、トラック借りて来る」

ねえちゃんが外に飛び出して行ったのと入れかわりに、じいちゃんが赤べえを連れてもどって来た。

「勇作、しっかりしろ。今、赤べえに乗せて病院に連れてつてやるからな。それ、赤べえ、病院までひとつ走りだ！」

ガクツ。僕を乗せた赤べえは走り出そうとして、でも、すぐにヒザをついてしまった。

「赤べえ、しっかりせんか！ 勇作が大変なんだぞ！」

じいちゃんの声に、赤べえは必死で立ち上がろうとしたけれど、足が痛くてもがくばかり。とうとう僕は赤べえの背中から、ずり落ちてしまった。

「赤べえ」

八

僕の病気は急性盲腸炎きゅうせいもうちようえんだった。ねえちゃんがトラックを呼んで来てくれたおかげで、手おくれにならずにすんだ、と、お医者さんは言った。そんな騒さわぎがあつて、とうさんは出稼でかぎに行くのを十日おくらせた。

病院から退院たいいんした日の夕方、僕は、馬小屋に行つた。僕を病院に連れて行くとして必死になつてくれた赤べえのことが気になつていたからだ。

馬小屋には、畑から帰つた赤べえがいた。

「赤べえ、ただいま」

馬小屋から顔を突き出した赤べえの顔をなでながら、下を見ると左足の二倍くらいにはれ上がった右の前足が見える。

「赤べえ、足、だいじょうぶか？」

鼻の先をなでやると、赤べえは心なしか、首をたれた。

「おまえ、この間のこと申しわけないと思つてんだな？ 僕だったら、だいじょうぶだつて。盲腸なんか、すぐ治なおっちゃつたし。なんか、おまえの方が元気ないぞ。赤べえ、おまえだつて、がんばっ



たんだから。ずっとずつと
とがんばって、足がこんな
になるまでがんばったんだ
から」

赤べえの頭が近づいて、
そのまま僕の胸に赤べえの
大きな顔がドシンとぶつ
かった。大きくてあったか
い赤べえの顔を両手いっば
いに抱きかかえたら、甘
酸っぱい馬のおいが鼻に
広がった。ふわふわの綿毛
に包まれた赤べえの大き
な耳が僕のほほをくすぐ
た。

九

その晩のことだった。夕食を食べていると、突然、じいちゃんが、
とうさんに言った。

「おまえ、出稼ぎ、やめれや」

「えっ？」

驚いて箸を止めたのは、とうさんだけではなかった。家族み

んなが、ポカンと、じいちゃん
の顔を見た。

「出稼ぎやめて、トラクター買えや」

「おじいちゃん、どうしたんですか？」

口をあけたままのとうさんに代って、かあさんが聞いた。

「赤べえは売る」

「トラクター買えって、じいちゃん、本当に赤べえ手放しちゃって
いいの？」



機械の味方のはずのねえちゃんまでが、心配そうに、じいちゃんの顔を見た。

「ああ、その方がいい。明日、家畜商の佐藤さんに引取りに来てもらう」

「そんなあー」 僕の声は、悲鳴みたいになった。「売ったらダメだ。じいちゃん、あんなに赤べえのこと可愛いがつてたのに。売ったら馬肉にされるのがオチだつて言つてたのに。農業は人馬一体じゃなかったんかい！」

「勇作、わがまま言わな

いの。あんただつて来年は中学生でしょ。何の仕事も出来ない馬をうちに置いとけないことくらいわかるしょ」

ねえちゃんは、いつもの機械の味方にもどつていた。

じいちゃんは、もう何も言わなかった。とうさんも、かあさんも……。



十

じいちゃんは、そのまま馬小屋に行つて歸つて来なかった。

僕は玄関げんかんを出て馬小屋に歩いた。明るい満月が、畑に積まれた豆ガラまめガラの山を銀色に照らしていた。

「赤べえ、今日はエン麦もニンジンもたくさんあるから、いくらでも食べ」

馬小屋では、赤べえの前に、じいちゃんがドツカと腰を下ろしてお酒を飲んでいる。赤べえの前にも大きなカイバ桶おけが置かれている。

「おつ、勇作か。まあ、そこに座れや。おまえ、今年で、いくつになった？」

「十二」

「ああ、赤べえが来たのが十五年前だから、おまえが生まれる前のことだな」

そう、僕が生まれる前から赤べえは、うちの家族だつた。だから、考えもしなかったけど、そう言えば、赤べえは、どこから来たんだろう。急に不思議ふしぎになつて、じいちゃんにたずねると、

「そうか、おまえは、赤べえの仔馬こうまのころのことは知らんもんなあ。」





「こいつと初めて出会ったのは、帯広神社のお祭りの日。あの頃は、ばんば競走もさかんだな。みんな、自分の馬、持ちよつては、『おれの馬が一番だ』って、競走させたんだわ。どんな小さな農家でも一家に一頭は馬持ってたからな。馬なしでは農業、できなかったもんな」

また、話が機械化のことになりそうだったから、僕は、急いで口をはさんだ。

「で、赤べえは？」

「うん、その、ばんば競走の会場にな、佐藤のじさまが『馬買わんか。先週、釧路へ行ってみつけて来た。まだ子つこだけど、毛なみはいいぞ』って言うてな、連れてきたのが、この赤べえさ。で、こいつを見たとなんに、わしは、すぐ買うことにした。ああ、前に買うことにしてた馬はやめにして、こいつを買ったんだあ。」

十一



なんであつて？ こいつ、小さいのに、いい顔しててな。これは働くぞつて、わたしにはわかつたんだ。あれから十五年、思った通り、いいや、思った以上に赤べえは、よく働いてくれたな」

じいちゃんはコップの中のお酒を見つめた。

赤べえは、そんな、じいちゃんを、黒くぬれた目でじっと見つめていた。



朝なんか来なければいい、と、僕は思った。じいちゃんも、赤べえも、きつと同じ気持ちだっただろう。けれど、やっぱり、いつもの通り朝は来た。それも、ピカピカの上天気じょうてんき。空気がすんで、遠く大雪たいせつの山なみが、手でさわれそうなほど近くに見えた。

家畜商の佐藤さんは、高い空の下、麦畑の間の道をトラックでやって来た。

「さあ、赤べえ、行くぞ」

馬小屋から引き出された赤べえは、秋の陽ひざしを、そのままはね返すようにかがいていた。

「最後の晴れ姿だから」と、じいちゃんが一晩中、柔やわらかくたたいたワラで、赤べえをみがき上げたのだ。

赤べえは、その名前の通り、燃え上がるように赤く光かがやいている。痛々しくはれた右前足。でも、それ以外は、筋肉でもり上がった胸も、たくましい首も、歩きたびに地面を押しつける太ももも、夢のように立派りっぱで大きくて、僕は、いつもよりアゴをあげて、赤べえを見上げた。

耳も首もシャンと立てて歩く赤べえ。その手綱たづなが、じいちゃんから佐藤さんに手わたされても、赤べえは、しっかりと前を向いてトラックに歩いて行つた。井いばちの蹄ひづめで歩板あゆみだをドスンドスンと



踏みしめて、トラックに乗りこむ時も、同じように前だけを見ていた。

そして、いよいよ、トラックの扉が閉められようとした時……。

赤べえは、太い首をグツとしならせて、僕たちの方を振り返った。見る見る赤べえの鼻が膨らんで、口が開かれた。

赤べえが、トラックから逃げ出して来る。綱を振り切つて、僕と、じいちゃんのところへ帰つて来る！ 僕は、そう思った。

でも、実際は、そんなことにはならなかった。赤べえは、いっぱい開いた鼻と口からカン高い声で、一声、ヒーン、と、いらないた。

それが、赤べえとの別れだった。

十三

あれから四十回の春がめぐつて、人も町も、何もかもが変わった。農業も大きく変わった。ト

ラクターも年々大型化。赤べえを追いやった小型のトラクターも大地から姿を消し、今は、

冷暖房完備、運転席にテレビまで備えつけた「走る家」みたいな超大型トラクターが畑を耕している。こんなトラクターだもの、値段だつて、家一軒分くらい。

もちろん、畑を見回しても、馬なんて、どこにもいない。あの赤べえのような、大きくてたくましい馬たちは……。

でも、ちよつと待つて。あの馬たちは、本当に、もう、どこにもいなくなつてしまつたんだろうか？ いや、ちゃんと彼らは生きている。ばんえい競馬、というレースで、赤べえたちの子孫は、がんばっている。もう、畑を起こすことはないけれど、昔と同じように重いソリをひいて、その力を、みんなに見せてくれている。そこには、赤べえと同じ馬のおいと、馬を育てる人たちの姿がある。おとなになつた僕は、時々、ばんえい競馬を見に行く。そして、そこで力強くソリをひく馬たちを見ながら、口の中でつぶやいてみるのだ。

「赤べえ」と。

（おわり）

<プロフィール>

米 永 道 裕 （よねなが みちひろ）

北海道高等学校文化連盟演劇専門部事務局長、札幌平岸高校演劇部顧問。1960年札幌生まれ。北海道大学卒業後、釧路湖陵高校、士別高校、新川高校を経て現在に至る。高校、大学と演劇部に所属、卒業後も士別時代では市民劇団に所属し、役者として活躍した。釧路湖陵高校時代から演劇部の顧問として活躍している。今回原案となった『斑馬の嘶き』（北海道高校演劇発表大会で創作脚本賞受賞）、『かくれんぼ』、『踊る平岸高校!〜ウルトラマンより愛を込めて』他多数の脚本を執筆し、全国各地で上演されている。生徒と一緒に芝居創りをすることが好きで、現在も悪戦苦闘しながら部活を楽しんでいる。

旋 丸 巴 （つむじまる ともえ）

エッセイスト。1959年、大阪生まれ。酪農学園大学卒業後、競馬図書出版社勤務を経て91年、フリーのエッセイストに。92年、晴耕雨読を志す夫と共に北海道十勝地方の山村に移住。現在も、純血アラブ馬や山羊、犬、鶏、アヒルなど動物に囲まれ、夫と長女との三人で田舎暮らしを満喫中。

競馬や映画、食などについて雑誌、新聞など幅広く執筆活動を展開。著書に『ハネムーンは巴里の競馬場』（ミデアム出版）『馬をめぐる冒険』（JRA馬事文化賞候補作・ぶんか社）『馬映画100選 銀幕に踊る馬たち』（源草社）などがある。

谷 歩 （たに あゆみ）

ばんえい競馬厩務員。1966年、奈良生まれ。幼少の頃、画用紙を前に何を描こうか考えている時に、『お前は午年生まれやから、馬描いてみ?』と親に言われた事がきっかけで、以降、馬の絵を描き続ける。絵の勉強をするか、大動物の勉強をするかで悩んだ末、動物を飼いながら絵は描き続ける! と、北海道へ。1988年、帯広畜産大学を卒業し、『シンザン』で有名な浦河町の谷川牧場に就職。2年目から種馬所に配属、シンザンたちの世話係となる。1993年11月より『ばんえい競馬』の厩務員となる。途中1年間療養するが馬が忘れられずカムバック、現在もばん馬との仕事を続けている。

2002年には友人と共に2人展『馬想展』を浦河町伏木田美術館にて開催。



赤べえ

平成16年3月 発行

原 案／米永 道裕 作／旋丸 巴 絵／谷 歩

企画・発行 十勝馬事振興会、十勝農業協同組合連合会、北海道乗用馬振興対策協議会
〒080-0013 北海道帯広市西3条南7丁目14番地 TEL 0155-24-2537 FAX 0155-25-4680

後 援 (社) 日本馬事協会、地方競馬全国協会

題 字 佐々木 堂児

印刷・製本 双葉印刷有限会社

落丁・乱丁はお取り替えいたします。



本書制作にあたって

ご協力をいただきましたすべての皆様に心よりお礼申し上げます。とりわけ、原案となった演劇脚本『斑馬の嘶き』を快く提供いただいた米永道裕さん、ご多忙にもかかわらず本書の文章構成と挿絵を引き受けていただいた旋丸巴さん谷歩さんには、大変お世話になりました。

また、本書作成のきっかけとなる演劇を披露してくれた帯広小学校六年生の皆さんと先生方にも、心よりお礼を申し上げます。